『梧溪集』について

要木純一

王朝の交代が繰り返される中国史において、知識人達は、さまざまな出処進退の決断を迫られた。旧王朝に対して節を守るものもあれば、変節、転向のやむなきにいたったものもあった。もちろん、新王朝での立身出世を求めて、喜んで旧を捨てて新に就いた、いかにも人格的欠陥に発するがごとく見える例は、史上枚挙にいとまがなく、後世の我々をしてしばしば啞然とさせるのであるが、よくよく研究を進めれば、それらの醜行として非難されつづけた例も、歴史に名声を残す上では失敗であっても、当時の一定の空気の下にあっては、ある程度やむをえざる選択として、同時代人に許容されていたであろうことがわかる場合が、これまたしばしばである。

一方、節を守ったとしても、思慮なしのそれは、親戚、友人に死の危険を与える迷惑な行為であり、社会的権威のある知識人の出処は甚だしくは一国一城(都市)の人民の生死に関わるのである。かかる困難、複雑な条件にあって、最も穏当なる、したがって消極的に傾く抵抗方法として選ばれたのが、新王朝に仕えず、旧王朝の遺民として、社会からの引退をよそおって生きる方策であった。

この遺民という生き方も、簡単に分析できるようなものではなく、現在の我々に理解しがたい面がある。というのは、人間関係が殊に濃密である中国社会に於ては、世を捨てることすらも自分一人の意志で決められる部分の少ない営為だからである。そして、その生き方の選択を促したのは、合理的な思想といったものではなく、時代の空気とでもいうべきものであり、したがって、違う時代に育った我々には、前後一貫しない矛盾に満ちた生き方のように見えるのである。筆者は、中国の遺民のあり方について、そこに思想性を求める巨視的な見方を一旦捨てて、個別のケー

スを探究することによって、その裏にある空気、雰囲気を全体的に把握できたらと考える。

本論で扱う『梧溪集』の作者、王逢（一三一九～一三八八）は、元の遺民として著名である。明の遺民達の思想性が論ぜられることは多くとも、元の遺民達のそれは論ぜられることは少ない。それは、無論、非漢民族王朝に節を尽くし、甚だしくはその復活を希望するという、近代的な民族ナショナリズムの観点からは、唾棄すべき立場に彼らがいるということによる。筆者はひとまずこの観点を括弧に括って、かれらの思想性を論ずるべきだとは思うが、「思想性」といっても、彼らを動かしたのは一般に呼ばれるところの「思想」といった底のものではなく、ナショナリズムから解放された思想史を想定したとしても、その中でもやはり遜色があることは認めざるを得ない。それにもかかわらず、彼らに行動の選択をとらせたあるものは厳然として存在するのであって、そこに筆者が「空気」を強調するゆえんがある。この思想史からは無視される非合理、曖昧な「空気」に出来るだけ感情移入して考えてみることこそ、文学研究でなければできないことではないだろうか。

王逢の生涯の概略と後世の評価を端的に知るために、まず、清の顧嗣立編『元詩選』初集　辛集（中華書局、一九八七年排印本）の王逢の項の前半の叙述を引く。

「逢は字は原吉、江陰の人なり。弱冠にして文名有り。至正中、嘗て『河清頌』を作る。行臺及び憲司交も之を薦むるも、皆疾を以て辞す。世よ江上の黄山に居り、自ら席帽山人と号す。地を無錫の梁鴻山に避け、未だ幾ばくならずして松（松江）の青龍江に遷り、寓する所に名づけて「梧溪精舎」と曰い、自ら「梧溪子」と号す。蓋し大母の徐嘗て手づから双つの梧を故里の横江に植うるを以て、忘れざるを志るす也。又上海の烏涇に徙り、草堂を築いて以て居り、「最閑園」と曰い、自ら「最閑園丁」と号す。明初、文学を以て録用せらる。其の子、通事令の掖は、父老ゆるを以て泣きて請う。命じて之を罷む。年七十にして卒す、洪武戊辰（一三八八）の歳也」

彼の人生は大きく分けて、他の元末明初に江南に生きた人々と同様に、三期に分けられる。すなわち、元の権威が未だ地に落ちていない時期、元末の混乱期(至正年間)、明初の遺民の時期である。このうち、筆者は明に入ってから

の遺民の時期を中心に扱うのだが、元末の混乱期、特に張士誠政権における彼の処世が従来問題になっており、後の遺民時期における彼の元朝への忠義の本質にも関わってくるのでここで触れておきたい。

まず先の引用に引き続いて、『元詩選』後半の叙述を引く。

「『梧溪詩集』七巻有り、銭牧斎の『列朝詩集』は之を前編に載す。謂わく、原吉は張氏呉に拠るに当たり、大府交も辟すも、堅く臥して就かず、と。而して又其の張氏の為に画策して、元に降って以て臺を拒ま使むるを称す。此は何の説ぞ也。張士徳（張士誠の弟）の敗は丁酉（一三五八）三月に在り、其の時張氏は尚未だ元に降らざる也。而して其の楚公（張士徳）の亡くなるに于いて餘恫有り焉と謂うは、未だ其の元の為にする乎、抑た張氏の為にするかを知らざる也。原吉は、一の老布衣、維新の化に沐浴する者二十年、其の子は已に仕籍に通ぜり矣。而して其の故国旧君の思いは、此の極に至ると謂うは、西山の餓と、洛邑の頑と、未だ其の又何ずれに処る所なるかを知らざる也。牧斎は好んで曲説を為し、謝皐羽（謝翺）、犂眉公（劉基）を引きて喩えと為すに至る、抑も何ぞ其の相類せざる乎。然れども原吉の詩は、志は元に在れば、則ち其の元の為にするを為す而已矣。故に遺民の例に附して而して之を録す」

銭謙益の王逢に対する評価について、異常なまでに紙幅を割いて反論するのであるが、要するに、遺民は遺民であるが、張士誠政権にある程度はくみしたであろうこと、明に対しても徹底的な抵抗者ではなかったであろうことほのめかす。

さて、それでは、銭謙益が『列朝詩集』の王逢の小伝でどのようにいっているかというと、顧嗣立が問題にしているのは、「『梧溪詩集』七巻有り、元宋の際の人才国事を記載す、多く史家の未だ備わらざる所。余嘗て其の後に跋して云う・・・」（『列朝詩集小伝』、上海古籍出版社、一九八三新版）とある後に引用する、自分が嘗て書いた跋の梗概の部分であるので、その原文の「跋王原吉『梧溪集』」（四部叢刊本『初学集』巻八十四）に当たって考察するのがよいであろう。

「梧溪詩集七巻有り、元宋の際逸民旧事を載す。国史の載せざる所多し。原吉偽呉（張士誠政権）の為に画策して、元に降って以て淮（すなわち紅巾賊、『列朝詩集』は臺に作っており、これでは行臺＝元朝杭州政権ということになり、

顧嗣立の銭謙益に対する疑問のもとの一つになったのかも知れない）を拒ま使む。其の「遊昆山懐旧傷今」（『梧溪集』巻四上）の詩は張楚公の亡くなるに于いて餘恫有り焉。而して呉城の破られ、元都の失わるるに至っては、則ち唇歯の憂、黍離の泣、激昂愾歎、情は辞に見わる。前後無題十三首（後述）は、庚申（順帝）の北遁を傷み、皇孫の獲え見るるを哀れむ。故国旧君の思い、此の極に至ると謂う可し矣。

謝皐羽の亡宋に於ける也、西臺の記、冬青の引、其の人は則ち甲乙を以て目と為し、其の年は則ち羊犬を以て紀と為す。廋辞謎語、喑哑して相向かう。未だ原吉の発攄指斥の一に鯁避する者無きに如くこと有らざる也。「戊申（一三六八）元日」には則ち「月明らかにして山に鶴は怨み、天は暗くして道に蛇横たわる」と云い、「丙寅（一三八六）築城」には則ち「孺子名を成して阮籍狂し、伯才主無くして陳琳老ゆ」と云う。殆ど狂にして而して詩に比す矣。或いは言う、犁眉公の元に在るや、慶元を籌り、石抹を佐け、死を誓いて馳駆すること、原吉と以て異なる無し。佐命の後、詩篇は寂寥たり。或いは故より其の志抑悒して未だ伸びざる者有る乎。

士君子の夷狄の世に生まるるや、其の毛を食いて而して其の土を履む。君臣の義は、国社屋を亡ぼすと雖も、猶お廃するに忍びざれば、則ち其の華夏に居り中朝に仕うるに、又主に背き国を売り、君父を以て市儈と為すを肯がわん乎。夷・斉の殷を忘れざる也、原吉の元を忘れざる也、其の志は一也。孔子は必ず取る有らん焉。彼の原吉は元の遺民為り、当に謝皐羽ら諸人と並んで忠義に列すべからずと謂う者は、其れ亦た春秋の法に闇き已矣」

以下の議論に関わる点も多いので長々と引用したが、王逢は元の遺民であるのはもちろんのこと、宋の遺臣謝翺を超える忠義の人であったという。そして、実際上どれほどの用を為したかはつまびらかにし得ないにせよ、王逢が張士誠の元に降るに際して画策をしたのはほぼ事実と思われるが、その画策を、銭謙益はあくまでも元朝の維持のためであると見なしている。

対して顧嗣立の方は、王逢の忠義の質に関してあくまでクールである。『梧溪集』巻四下「舟過呉門感懐二首」を、『元詩選』が引用した後に、顧はわざわざ附論して述べる。「張氏の浙西に拠る也、原吉に功名の望み有り焉」。王逢は張士誠政権に於て重用されんことを願った。それゆえ、張氏の滅亡に対して、「尤も痛惜の念多し」。そして、おそ

らく銭謙益を目して、「(張) 士徳 (士誠の弟、王逢が直接働きかけた相手) を称して孤忠と為し、東呉を謂って唇歯と為すに至っては、是則ち書生の見なる而已矣」とあざける。明代に入ってからの王逢も、忠節の臣に比すべくもなく、先の引用にあるように、「故に遺民の例に附して而して之を録す」という冷たい位置づけである。

中国知識人の有りようからいって、筆者も王逢の実生活を論じるならば、顧の想定した人物像が妥当なものであるかと思う。しかし、文学者は実生活のなかにのみ生息するのではない。『梧溪集』の形で結晶した彼の文学を論じるとき、その世界は現実を超えた仮想現実に属するものであるから、顧には「原吉の詩は、志は元に在れば、則ち其の元の為にするを成す而已矣」とあっさりとした印象でしか見えないもの、顧が卑小化したものを、最大限に延長した姿を我々に露わにしてくれる銭の立論は、それが実生活から遊離して文章によって生きる「書生の見」なればこそ、かえって珍重すべきである。王逢の文学は、まさに後に明を捨て清に降り、人格の破綻を天下にさらした銭謙益が、その文学史上の価値は否定されることのないのと一般に論ずることができるのではないか。

『梧溪集』のテキストの問題に関して、簡単に触れておく。『梧溪集』の序や跋によると、彼の文集はいくたびか刊行されては、滅びかけ、伝本がすくない状態であったが、数々の篤志家の校正を経て、『知不足斎叢書』第二十九集所収の『梧溪集』の形にまとまった。他に簡単に見ることのできるテキストとして、文淵閣四庫全書本が有るが、劉兆祐の『四庫著録元人別集提要補正』(私立東呉大学・中国学術奨助委員会、一九七八) によれば、『知不足斎叢書』本、『四庫全書』本、どちらももととなるのはおなじ浙江鮑士恭家蔵本であるという。

「按ずるに四庫本は浙江鮑士恭家蔵本に拠りて繕録す。鮑廷博は乾隆末に於て、嘗て蔣西圃鈔校本を得て、此の書を将て知不足斎叢書に刻入せんと意い、顧広圻に属して勘訂せしむるも、未だ成るに及ばずして而して廷博は卒す。嘉慶二十一年 (一八一六) (鮑) 渌飲の子志祖は復た (顧) 千里に謀る。千里、葉廷甲等の校補を経て、七年を閲して始めて成る。時に已に道光三年なり矣。今此の底本 (台湾) 中央図書館に存す、甚だ是宝とす可し」

二本は付録等に別が有るが、字はほぼ一致する。本論文では『知不足斎叢書』本を用い、『梧溪集』とあるのはこの

テキストを指す。

さて、錢謙益が「故国旧君の思い、此の極に至ると謂う可し」と絶賛する前後無題十三首、すなわち、『梧溪集』巻四下に収められる「無題五首」、「後無題五首」、巻六の「無題の後に書く、凡そ三首」の十三首を、筆者も王逢の傑作と考えており、これらを中心に王逢の世界観を論ずるつもりだが、そのまえに他のいくつかの作品に触れて、王逢詩の全体的な特徴を把握しよう。

楊維楨の「梧溪集序」（『梧溪集』の前に冠する、無論、元代に成立していた部分の『梧溪集』に寄せた序）に、「帖木侯、張武略、・・・無家燕の諸篇の如きは、皆他日の国史の為に本を起こさん、亦た杜詩の流歟」とあるように、『梧溪集』を繙読して受ける第一印象は、詩史と呼ばれる杜甫詩との類似である。王逢の詩には、杜詩と同様、滅びゆく時代の人やエピソードやそれらに対する自分の感慨を細大漏らさず、なんとか文字の形で定着して、不滅のものとして後世にのこしたいという意気込みが感じられる。その焦りにも似た情熱は、かなり早くから元朝が滅びる運命であることを見据えていたからではないかと、筆者は考えている。そこで彼がもっとも危惧したのは、空気のごとくその中で当たり前のものとして生きてきた彼の時代のありようが、当たり前ゆえに後世に記録として残らないのではないかということであった。それゆえに、明代、『梧溪集』の再刊に功があった陳敏政の、景泰七年『梧溪詩集後序』（『梧溪集』末尾に附する）に、「先生嘗て其の微詞奥義及び人名地里の暁り難き者を各詩の首めに標題す」と指摘されるように、異常なまでに長い序を詩に附するのが、彼の特徴であった。

大官のエピソードはもちろんのこと、宋元革命の時や元末の乱で、貞節を守って死んだ名もない妓女達（「馬頭曲」『梧溪集』巻三）、元朝のために奮戦したが、味方の不協力によって死んだ悲運の将軍（張武略『梧溪集』巻三）など、ここ百年の、普通の歴史には残されないような些事まで後世に残すべく努力している。甚だしくは、「聞蛙書事」（『梧溪集』巻五）の引にあるように、「先朝の不魯罕皇后出でて東安州に居る日、其の地蛙多し、既に人を遣わして旨を諭せしむ。蛙遂に屏息す。今に迄るまで鳴かず」というような、筆記小説にする類のことまで詩にせずには済まなかっ

た。

彼の死の直前の作と思われる、「即時五首、桃浦の諸故人に寄す」（『梧溪集』巻七）の其の三にいう。

「章有るも擲還す大尉の閤、版有るも受けず丞相の垣。南朝の天子病を謝するを許す、竊かに木石を長ず儀鸞園（王逢の庭園の名）。平生の気節詩千首、才は元亜（元遺山＝原注）に非ざるも劉後（劉静修＝原注）に甘んず。素より聞く魯廟金人を鋳し、晩れて程門を学んで泥偶に坐すと。双平原裏（新たに得る原の名＝原注）庶わくは帰するを全うせん、他日の壙銘は大手を辞す」

先述の銭謙益が狂気に近いと驚いた、朱元璋を「南朝天子」と目した問題の詩で有るが、まさに滅びゆく元という時代に殉じ、その時代精神の正確な語り手たらんとするのが彼の早年からのいささか錯誤した夢であり、「杜詩の流」と称されるのもむべなるものがあった。過去の詩人ではなく、元初の詩人たる元好問や劉因と比較して自らを位置づける点に、あくまでも元の伝統の末に生まれた詩人であるという、彼ならではの自負が見える。

そして、杜詩の詩史の面だけでなく、杜詩の第二の側面ともいえる、悪夢に似た幻想性も濃厚に受け継いだ。このことに関して同じく幻想的な詩で一世を風靡した楊維楨との関わりを見ていきたい。

そもそも楊維楨が『梧溪集』に序を寄せているのでもわかるように、彼は楊とかなり親密で、『梧溪集』にはそのことをうかがわせる作品が多い。例えば、「楊鉄崖司令に寄す」（『梧溪集』巻一）、「尹伯奇を哀しむ一首、楊鉄崖に寄す」（『梧溪集』巻五）、「楊女貞、楊鉄崖提学の為に作る」（『梧溪集』巻五）などがある。楊維楨が死んだときも、「楊鉄崖提学の凶問を聞く、麗則遺音賦一巻有り、世に行なわる」（『梧溪集』巻五）という長詩を作っている。

江南の文壇の立て役者である楊維楨に、王逢が相当な影響を受けたことは間違いない。例えば、「江辺竹枝詞」（『梧溪集』巻五）は、楊維楨が創始した「西湖竹枝詞」を明らかに意識して作られている。しかし、模倣しても、天賦の違いは如何ともしがたい。楊維楨は李白、また李賀を祖述して、空想を無際限にはばたかせるタイプであったのに対して、王逢は杜甫を志向したからである。

同じ題材をよんだ詩を比較することによって、二人の作風の違いを見よう。まず、楊維楨の「精衛操」（『鉄崖先生古楽府』（『四部叢刊』所収）巻一）、

「水は海に在り、石は山に在り、海水は縮まず石は刊られず。石を銜みて海に向かいて安き、口血は離離として海と同に干かん」

これを模倣して王逢の「精衛辞」（『梧溪集』巻一）は作られたと見られる。

「維れ山に兮石有り、維れ木に兮枝有り、朝に銜み暮に銜み兮塡むるに已む時無し、形は瘁れて翮は鎩して兮口血は淋離たり、海の大なるや兮天倪、海の浸すや兮天池、海の田に変ずるや兮天は実に我が為すところ、身は甚だ微眇にして兮心は海を窺う莫し、於乎、精衛の如き人兮誰か其れ汝を悲しまん」

楊維楨の方はイメージの強烈さを大事にして、説明は出来るだけ省いて、飛躍に富む。最後の句もよく考えるとおかしい理屈であるが、ともかく異常な幻想性を作るのが第一の目的だったのである。それに対して王逢のは辞と操とジャンルが違うということもあるが、くどくどと理屈を繰り返し、結局、精衛が人間世界のある比喩であることをあらわにする。つまり幻想性に徹して遊び続けることができないタイプなのである。この楊と王との関係は、ちょうど李白と杜甫との関係に似ている。自由奔放に想像の翼をはばたかせる先輩李白の幻想の世界に遊ぶ作風を見て、それに対抗するような形で、杜甫は幻想性を抑えて、リアリスティックな独自の境地を開拓した。それと同様に王逢の史実にこだわる作風も、対照的な楊維楨の詩があって始めて成立するものであったと筆者は考える。

したがって、これまた杜甫と同様に、王逢の詩の多くも幻想への志向が意図的に抑えられているだけである。彼の本領の一つは、質は異なるかも知れないが、楊維楨に劣らぬ幻想性であると筆者は考える。元末、明と、だんだん言論が不自由になり、自己規制が必要になってくると、王逢の作品には、従来のように、「其の微詞奥義及び人名地里の暁り難き者を各詩の首めに標題」しない、一読では意図の分かりにくい詩が現れてきた。それらは元朝への思慕と明朝への反発を幻想的なイメージでおぼめかすもので、ここに王逢の独自の境地が開かれた。いくつか例を挙げよう。

「児の掖の書を得たり、時に戊申（一三六八）歳」（『梧溪集』巻四下）なる詩、

「客は躬ずから隴に耕すを夢みるに、児は書もて家に過ぎるを報ず。月は明らかにして山に鶴は怨み、天は黒くして道に蛇は横たわる。宝気は空しく水を遺し、春程は花を見ず。衰容耆旧に愧ずるも、猶お玉人の車を話す」

明が改元を宣した年に読まれた詩である。その直前に「掖還郷」なる詩が収められていることでわかるように、故郷江陰に帰った息子掖から手紙を受け取ったときの感慨を述べるのであるが、先に銭謙益が『列朝詩集』の小伝で第三、四句をわざわざ引用したように、王朝の交替を目にした暗澹たる気持ちをよんだと思われる。「鶴」といい、「蛇」といい、もちろん実景ではあるまい。幻想的な心象風景である。ここでは、くだくだしい序がなくて、「時に戊申年」とだけ題にあるのが、かえって読者の想像に幅を持たせ、文学的効果を上げている。このように朱元璋に対する嫌悪をぎりぎりの仕方で表現するのであるが、それは自分の作り上げた文学空間の中のことであって、実生活での態度はこれと乖離していたらしい。「児の掖の消息を得」（『梧溪集』巻七）にいう。

「冢子江左に官たり、頻りに好信を将て帰す。敝衣は鶉のごとく百結、恩誥は鳳のごとく双飛す。璽鑰封ずるは常に早く、経筵講ずるは違わず。三年当に省覲すべし、環珮もて彤闈を下れ」

この詩には、素直に息子の明王朝での立身出世を喜び、その帰りを待ち望む親の姿があるのであって、それ以上の深読みを必要としないと筆者は思う。

背景をはっきりいわないで、おぼめかしによって、新王朝への不快感をともなった感慨の表現は晩年にいたるまでずっと続くのであって、先に引いた最晩年の「南朝天子」の語もそうであるが、やはり銭謙益が引いた「西厦に書す、時に洪武丙寅（一三八六）、沿海に築城す」（『梧溪集』巻六）にいう。

「床頭に鴟は臥して久しく金を空しくす、壁上に蝸は行きて尚お琴有り。孺子名を成して阮籍狂し、覇才主無くして陳琳老ゆ。虹霓気は貫く登萊の市、蝙蝠群は飛ぶ顧陸の林。環海煙沙万重翻し、連村霜月孤衾を抱く」

銭は第三句、四句のみを引くが、実は、「鴟」、「蝸」、「虹霓」、「蝙蝠」と初めから終わりまで無気味なイメージに彩られており、王逢は直截的な第三、四句よりも、これら悪夢に似た幻想的イメージこそを修辞上の第一目的としたと

筆者は考える。その悪夢のもとで人々は「孤衾を抱く」ほかないのである。

それにしても、朱元璋の残虐さを知る我々は、このような表現が命がけのものであったろうと推測するのだが、あるいはいわれるほど明の言論統制は隅々まで及んでいなかったのか、当時の禁忌のありようを筆者はつまびらかにしえない。これら危険な詩句を含む『梧溪集』が明代に復刊されたことと併せて、今後探究を続けたい。

「無題」詩の読解に入るまえに、もう一つ作品に当たっておきたい。「擬河清頌」（『梧溪集』巻六）である。黄河が澄んだという風聞を聞いて、鮑照の「河清頌」に倣って作ったもので、士大夫間の話題になり、先に引いた『元詩選』にあるように「行臺及び憲司交も之を薦」むる次第となった。末に王逢がおそらく自ら文集を整理したときにつけたであろう文があり、「逢擬すらく、此の時、至正甲辰（一三六四）の歳」という。この作品に王逢の世界観が端的にうかがえるので、引用する。

まず序の冒頭から、

「草野の臣の某某言う。臣は本江陰の鄙人也。素より仕うるを希まず。甘んじて壟畝を分とし、読書して道に向かい、以て雍熙の治を詠う。比のごろ郷邑故多く、呉下に客遊して、且さに七年にならんとす。今年春三月、躬ずから聞くならく、黄河清きに変ず、雲漢に混合し、昭融岳に光つ、青・徐・斉・魯・淮・楚の間、神人驩汴し、魚鳥咸な若う。卉木の品彙、尽く休沢に沾う。竊かに惟うらく、河源は天自り地中に注ぐ。経亘袤衍は幾万里なるかを計らず。夏禹の疏鑿、功用同に大なり。厥の後、華夷域を異にす。代よ澂澈を見ると雖も、誠に未だ天地の嘉応に当つるに足らず。我が朝海宇を一にし、昆侖・葱嶺は始めて化の内に在り、仁洽く徳流れ、百年に及ぶに垂んとす。天用て彰かに陛下に報ず。・・・」

そして本文は、「皇帝即位三十の春、黄河清きに変じて月は辰に在り」と皇帝を寿ぐことから始まり、「於穆世祖堯舜の仁、大禹の功沢聖神に帰す」で結ばれる。

皇帝の徳が高いので、河清の奇瑞があらわれたという内容は、鮑照どころか古代から連綿と続く天人相関説に基づ

いたものだが、その背景にある世界観が違う。それは元朝でなければ生まれなかった世界観である。河源を含めて、黄河全体が版図に入ったのは、元朝が初めてである。それどころか遠く崑崙山、葱嶺も、かつてのように、神仙的、伝説的世界ではなくて、実際に行ける、現実性を帯びた場所となった。それらを「化の内に入れた」元朝の巨大さへの感動がこの作品を生んだ。

その巨大な世界の象徴として「雲漢に混合」する「河」がある。延々と天まで続く黄河こそ、王逢の夢想する「世界」を支える。これが「江」では駄目である。南人にとっては「江」はあまりに身近に過ぎる。現実に存在するが、いまだ南人の見たことのない「河」であってこそ、空想を掻き立て、雄大な世界へと導いてくれる。一種の幻視の快感である。かくのごとき新たな境地は、元朝の統一がなくては達しえなかった。文学者として、この境地をいまよまずして、いつよむというような気負いがこの作品に感じられる。

以上のような幻想をもとにした、雄大な世界観のもとで、彼の絶唱の「無題」詩も生まれた。まず、前半の無題五首（『梧溪集』巻四下）から見てみよう。（各首の番号は筆者がつけた）一三六八年、明の北伐に耐え切れず、順帝が北方に逃げた情勢を受けて作られた詩である。

「一、五緯南行して秋気高し、大河の諸将児曹を走らしむ。鞍を投ずるも尚お熊耳に斉しかるを得ん、甲を捲くも何ぞ虎牢を棄つるに堪えんや。汗隴馬は肥ゆ青苜蓿、甘涼酒は圧す紫葡萄。神州は比して仙山の固きに似たるに、誰か料らん長風巨鼇を掣せんとは」

天体の動きから叙述が始まる。遙か遠く手の届かない北方に思いを寄せる手段として、天界を通して念ずるのが、王逢の常套である。例えば、かつて一三六二年、元将チャガンテムール（漢名李上公）が済南で賊に殺されたとき作った「七月河南平章の凶問を聞く」（『梧溪集』巻三）にいう。

「六月妖星芒角白し、幾夜徘徊す天市の側。尋いで聞く盗李上公を殺すと、羇旅の孤臣は涙臆を沾す。当時寛猛は萑沢を制す、安くんぞ得ん降を受くるに翻って敵を受くるを。上公の忠名は竹帛に垂れ、書生は奚ぞ費褘の為に惜しま

んや。東南の風は動き旗は黄色、蒲梢の天馬は長しなえに北に依らん」

天体の異変が讖となって、李上公の死が伝わり、最後に「旗」「天馬」（ともに星座の名）と、天上の世界へ戻っていく。元の版図はあまりに大きい。それを天にうつすことによって、遠隔の地の人事と共振しあおうとするのである。『梧溪集』巻七の「犁星芒」のような、星の名尽しの詩を作ることができるほど、王逢の天体に関する興味と造詣は深かった。

もとの「無題」詩に戻る。第二句には、「黄河」が現れる。ここに込められた感情は、恐らく先に引いた「擬河清賦」と同じい。黄河が雄大な世界への入り口なのである。第三句から第六句、地名が次々と現れる。それは、あたかも、この地上世界の位置関係、秩序を一つ一つ確かめるかのようである。第七句、元朝が仙山のごとく固いというのが、いかにも王逢らしい。彼にとって、幻想の世界にある仙山こそ、現実の何よりも確実なのである。

このように、独特の雄大な世界観を、微妙な修辞によって、表現したのが、「無題」詩なのである。以下の詩は、簡単な説明のみを加える。

「二、天槍幾夜鈎陳に直り、車駕高秋重ねて北巡す。総じて謂う羽林猛士無しと、金屋に佳人有るに縁らず。広寒の霓杖華月を間て、太液の龍舟白蘋を動かす。雪は上京に満ちて大饗を労す、西のかた華嶽を封じて秦民を弔む」

一で巨大な天地を描いた後に、この世の大主催者である皇帝「車駕」が登場する。実は北に逃げたのであるが、王逢の幻想世界では、乱に苦しむ人々を慰める救世主として、劇的に現れるのである。

「三、白衣鏞艫呉兵を渡らしめ、赤羽旌旗趙営を奪う。灤水に天は廻らす龍虎の気、榆林に風は逐う馬駝の声。靚粧の宮女は竹に啼くを愁え、白髪の祠官は桜を薦むるを憶ゆ。猶お海鷹神の王たらざる有り、鵞に駕して高く塞雲の平らかなるを去る」

明の北伐に対して、元朝はなお再起可能である。皇帝に取り残された、宮女や宮官たちは往時を忍んでいる。第七、八句、海鷹神が誰を指すかはつまびらかではないが、恐らく王族の一人の援軍を期待しているのではないか。第二首もそうだが、天界から地上を俯観するような視線で幻想を描く。

「四、五城月落ちて朝鶏静かなり、万竈煙は消えて水犀入る。椒闥の珮琚は白草に遺てられ、木天の図籍は青藜に冷し。北臣は旧と説う斉の王粛、南仕は新たに聞く漢の日磾。天意人心竟いに何くにか在らん、虎林還お控う雁門の西」

一転して、破壊された都の様子を描く。変転窮まりない人心。最後の句、「虎林」は杭州の地名であると思われるが、それならば、王逢のいる江南と遠く雁門が一縷の線で結ばれているイメージが喚起される。滅びの予感の中で、彼の心は遠い地域の動きに、神秘的な共感、共振を覚えているのである。

「五、廿載群雄は百戦に疲れ、金城万雉は自ら湯池なり。地は玉冊に分たれ盟は俱に在り、露は銅盤に仄き影は支(はな)れず。中夜馬群風は北に向い、当年の車轍日は南に馳す。独り憐れむ石鼓の秋草に眠るを、猶お是宣王頌美の詞なり」元の復活を期待しつつ、しかし、最後は草に埋もれた石鼓文という滅びのイメージで終わる。ただ最後の句は、一つの時代が去っても、その時代が生んだ文学、すなわち王逢の詩文が後世まで不滅であらんことに最後の望みを託していることを表現していると思う。

「後無題五首」(『梧溪集』巻四下)は、恐らく、元朝の情勢がますます悪化していく中で、作られたらしい。元朝の復活を望む気持ちに変わりはないが、あきらめの心情は募っていく。

「一、一国に三公狐狢の衣、四郊墨多くして鳥蛇囲む。天街辨ぜず元(玄)黄の馬、宮漏稀れに伝わる日月の闈。嵇紹は能くす可し濺血を留むるを、謝元(玄)は那んぞ及ばん戎機を総ぶるに。祇だ応に大駕して西楚を懲らすべし、虞歌に対して北のかた渡りて帰らざれ」

分裂、混乱を悲しむ気持ちはなお続く。「後無題」詩も、朝廷を天にたとえた、巨視の描写から始まり、元朝の復帰を期待する。

「二、吐蕃回紇使いは何如、馮翊扶風守り太だ疎なり。范蠡辞せず勾践の難、楽生は何ぞ忍ばん恵王の書。銀河珠斗沙幕に低れ、乳酒黄羊は拂廬に滅ず。北陸漸く寒くして冰雪早し、六龍好く扈え五雲の車に」

前「無題」詩と同じく地上を俯観するような描写である。「沙幕」、「乳酒」、「拂廬」等蒙古特有の風俗が書かれてい

る。これらの語は北方民族の風俗を表わすものとして、古典以来使われていたものではある。ただ、その場合、蛮族への蔑みの気持ちとともに用いられていたのであるが、今は同じ語を用いながらそのような気持ちはない。蒙古統治で生まれた新しい世界を描写しながらも、なお、できうる限り漢民族の古典世界に引きつけようとする精神の働きが見える。

「三、首を回せば崑崙五色の天、疎風落日重ねて佪徳。駕に八駿を驂するは鎬を忘るるに非ず、臺に千金を置くは旧とのごとく燕を慕う。地は上林を限り雲に雁は過ぎ、雪は西嶺を封じて樹に鵑は啼く。遠く慙ず行在の周廬の士に、草に横たわり功無くして日び晏くまで眠るを」

「擬河清賦」についてすでに述べたように、「崑崙」は今や元の版図に収められ、目の当りに見ることは難しくとも、現実性をかなり与える地名となった。古典で用いるのと同じ語だからといって、短絡的に単なる模倣と考えてはならない。同じ語に盛ったイメージは違うものになっている。その背後には古典と異質の世界観がある。読み手もそう感じていたはずである。後半、王逢の意識は元の版図いっぱいへと広がっていくのだが、逃亡中の皇帝のために何もできないのを恥じている。

「四、険塞の居庸は未だ劚するに易からず、望郷臺上に望郷するもの多し。君心は隔てず丹墀の草、祖誓は未だ忘れず黒水の河。前後の炎劉中運歇み、東西の元魏百年過ぐ。愁え来りて較する莫れ興衰の理、只だ当時の徳若何なるかに在り」

漢や北魏のごとく、王朝の命運が一度つきてしまったかに見えて、いろいろな形で長らえた例もあり、元朝もその徳次第で復活可能かも知れないという。非漢民族の北魏が王朝復興の例として引かれていることに注意。中国の歴史の中で、現状を表現するのに適切な故事を探し出して、自己の世界観を補強しようとする必死の努力を筆者は感じる。

「五、黄河は清浅にして海塵揚がり、陜月の関雲気は惨蒼。寧ぞ明珠を復するは甓社を専らにするのみならんや、尚お玉兎金床に踞るを論ず。衣冠は並びに入る梁園の宴、簡冊は潜かに回らす孔璧の光。私かに幸いとす老帰して世事を忘るるを、梧桐の朝影は溪堂に対す」

第三句、甓社の珠の故事を用いつつ、甓社湖の戦いをきっかけにして霸を唱えるに至った今は亡き張士誠政権を暗示する。王逢は彼の力を借りて元朝の復興を志したが、失敗した。だが、まだ希望はある。第四句、唐末、「兎金床に上る」の讖語を利用して、今の紹興で偽帝を称した董昌の故事（新唐書巻二二五下）を用いる。あるいは董昌と同じく浙東を根城とする海賊方国珍を促して、朱元璋に対抗せしめんとの底意があったか。第五句、第六句は恐らく、自分が嘗て元朝復活の画策をしたことを回想。しかし、いま自分は何もなしえないままに人生を終わろうとしている。第七句「私かに幸いとす」について、深読みかもしれないが、筆者はこの句に王逢の文学者としての本音を見たい。すなわち「世事を忘れて」、自らが築き上げた世界観にひたり通すことこそが、自分の快楽なのであると。現実にはたらきかけるよりも、幻想の翼ををはばたかせる方が彼にとっては幸いだったのではないか。

このような退嬰的な自己満足に飽き足らないものを感じたのだろうか、後に元の皇子が捕えられたのをきっかけとして書かれた「無題の後に書す、凡そ三首、偶ま燕太子丹の事に感ず」（『梧溪集』巻六）では、なお元朝復活への期待が多く語られている。しかし、これはあくまでも後日の付け足しであって、本論では前後「無題」詩十首で完成した作品であるとみなして論じた。

議論が錯綜して分かり難いので、ここで、「無題」詩からうかがわれる王逢及びその詩の特徴についてまとめておきたい。

一、詩の対象であり、背景である世界が広がった。無論、過去の中国人も空想上で、世界の果てや、天上界に遊んだが、ここでいう世界は現実性をともなったものである。「崑崙」はもはや昔の「崑崙」ではない。一句全部甚だしくは一首全部が過去の作品の模倣であっても、この時代の読者には過去と違う感触をもって迫ってきたのであり、そこに模倣をいやしむ観点では見えにくい新鮮さがある。

二、そして、その世界との一体感。たとえ現地にいかなくても、世界のあらゆる部分が王逢の心の琴線と共振しあうのである。その世界とのつながりは天の星座や黄河の流れに託してようやく表現しうる、微妙な感覚であった。現実

世界には何ら意味を持たない「書生の見」ではあるが、王逢という個人を支えるものとしては必須の世界観であった。それなくしては生きてはいけないほどの快楽の源であったので、この信仰を捨てることは彼にとって死を意味したであろう。

三、一、二は元王朝の統一がなくては存在しえなかった感覚であるが、それでもなおモンゴルの文化を、自らが育った漢民族の伝統の枠の中に引きとどめて理解しようという意志が感じられる。それを漢民族の限界だという人もいようが、これは観点の違いである。王逢は南宋の故老が健在のころに生を受けた人であり、江南ナショナリズムとでもいうべき、地域的な感情が盛り上がった元末、南宋への回顧の感情は否定すべくもなく彼に存在した。その感情は「銭塘春感」（『梧溪集』巻一）、「感宋遺事」（『梧溪集』巻二）など折に触れてよまれる。そして、宋元革命期のおびただしいエピソードを「詩史」として残したのである。彼は元を何とか宋までの歴史の延長線に位置づけようとした。そうすることによって逆に宋までの歴史が無駄な営みではなかったことになるのである。彼はまた、「蒲稍」、「乳酒」、「沙幕」など、中国古典語の世界でモンゴルの文化を表わそうとする。その措辞上の試みは、今日の我々には竹に木を接ぐような印象を与えるが、そこに彼の必死の努力を読み取らねばなるまい。

四、以上のような世界観をもったうえでの、遺民、隠遁の快楽が詩の底流にあると、筆者は思う。死の危険と隣り合わせである、遺民という選択の原因を快楽に求めるのは、甚だ不穏当であろうが、死の恐怖を超えるほどの快楽があったゆえに転向せずにすんだと考えるほうが分かり易いと、あえて過激な見解を筆者は持つ。王逢にとっては、自己の世界観を詩文の形に移すことのみに、全力を注ぎ、実際的な行動をしないことこそが、その世界観を傷つけずに全うする方法なのである。遺民の目的は、身を守りつつ、節を貫くという道義上の価値もあるが、自己のひたる夢から抜けでたくないためということもありうるのではないか。それほどまでに強烈な夢、世界観を、元王朝は知識人たちにもたらしたのである。